

芸術WG取りまとめ骨子案 (イメージ)

1. 現行の成果・課題を踏まえた改善の方向性①

(1) 現状の成果

現行学習指導要領の考え方

- 現行の学習指導要領においては、
 - ▶ 「生活や社会の中の芸術や芸術文化と豊かに関わる資質・能力」などを規定
 - ▶ (1)知識及び技能、(2)思考力、判断力、表現力等、(3)学びに向かう力、人間性等、の三つの柱で目標や内容を整理することで、芸術系教科・科目で育成を目指す資質・能力の明確化を図った
- 芸術系教科・科目においては、身体を通して、知性と感性を融合させながら対象や事象を捉えていくことを重視し資質・能力を整理

これまでの成果

- これらの改善を踏まえ、芸術系教科・科目においては、資質・能力の育成を意識した授業改善の取組が着実に進んでいる
- 音楽を聴いて捉えた特徴について理解したり、音楽を形づくっている要素と関わらせて言葉で表したりすることなどについて授業改善の取組が着実に進んでいる（音楽）
- 児童生徒が感性や想像力を働かせ、造形的な視点を豊かにもつとともに、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連付けて育成し、楽しく心豊かな生活を創造しようとする態度を育むことができるよう、指導の充実が図られてきている（図画工作、美術、工芸）
- 生活や社会における書の目的や用途と表現効果や風趣との関わりについて考え、書を生活や社会の中でどのように生かすかを考えたり判断したりすることについて指導の充実が図られている（書道）

(2) 現状の課題

現行学習指導要領の趣旨の実現状況と芸術系教科・科目の特性を生かした学びの充実

- AIの進化やグローバル化、知識基盤社会への移行に伴い、正解のない問いや予測困難な課題に対処できる力が求められている。このような中であって、調査結果によると、芸術系教科・科目の学びの意義について児童生徒が十分に実感できている状況には至っていないと考えられる

令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査の結果の例

- ・「音楽の授業で学んだことは、私たちの生活や社会でいかすことができると思う」
→ 肯定的に回答する児童の割合が55.5%
- ・「図画工作の時間で学習したことを、ふだんの生活の中に生かしている」
→ 肯定的に回答する児童の割合が60.1%

- 芸術系教科・科目においては、創造性を発揮しながら、問いやテーマ、答えを自分で作りだしていくという特色を有しており、これからの社会を創り出していく子供たちに必要な資質・能力の育成を担っている
- AIがより進化していくこれからの時代において、身体性を基本とする人間の本来的能力としての技能の位置付けが一層重要。芸術系教科・科目においては、思いや考えを基に新たに作りだし、その際に身体を用いて具現化していくという児童生徒の学びの姿に即した資質・能力のあり方が求められる

1. 現行の成果・課題を踏まえた改善の方向性②

資質・能力の整理に関する課題

- 表現について自分の思いや考えをもつことと、思いや考えを基に身体を用いて表現することが一連の流れとして捉えにくい点に課題がある

【教科・科目ごとの課題について今後整理】

学習指導に関する課題

- 学習指導に関して、例えば、以下の課題がある
 - 根拠を明確にしながらいや意図（表現意図）をもち、技能の習得や活用によって豊かな音楽表現の能力を身に付けるとともに、音や音楽の新たな価値を見いだしていくこと（音楽/表現領域）
 - 音楽表現の共通性や固有性などについて考えたことを根拠としながらいやのよさや美しさを味わって聴くこと（中・高音楽/鑑賞領域）
 - 発想や構想をすることや、意図に応じて創造的に表すことについて、過程を重視した指導への改善（図画工作、美術、工芸/表現）
 - 作品などの表現の意図や特徴、創造的な工夫などについて根拠をもって感じ取ったり考えたりできるようにすることへの改善（図画工作、美術、工芸/鑑賞領域）
 - 創作の指導において、作品や書の伝統と文化の意味や価値を自己との関わりを通して考えながら、表現の意図を自ら想起し創造的に構想・工夫すること（書道/表現領域）
 - 古典や名筆、名品を鑑賞する機会の一層の充実や、鑑賞を通して身に付けた資質・能力を表現に関連付けること（書道/表現・鑑賞領域）

学習評価に関する課題

- 学習評価に関して、作品の出来や上手に歌えたかといった結果のみではなく、そこに至るまでの過程において目指す資質・能力が育成されているかという点を評価することに課題がある

1. 現行の成果・課題を踏まえた改善の方向性③

教科・科目の特性を生かした学びの充実に関する課題

- 芸術系教科・科目ならではの学びの充実を図るために、例えば、以下の改善を図ることについて課題がある
 - 芸術の働きを意識したSTEAM教育などのカリキュラム編成
 - 我が国の文化芸術に関する教育の充実
 - 芸術教育の特性を踏まえた1人1台端末を含めたデジタル学習基盤の活用
 - 多様な人材の活用や学校外の文化施設との連携
 - 教師の指導力向上

伝統と文化に関する教育に関する課題

- 各学校においては、地域の実態等を踏まえ、特色を生かした指導が行われているものの、他方で、児童生徒が伝統と文化を学ぶ意義を感じられるようにしていくことについては、一層の充実が望まれる

デジタル学習基盤の活用に関する課題

- 教科の特性を踏まえた実体験に基づく学びを重視し、実際に身体や材料、用具、楽器などを使って表現する活動との調和を図りながら、デジタル学習基盤を効果的に活用できる指導のあり方に課題がある

メディア芸術に関する教育の充実に関する課題

- 我が国のマンガ、アニメ、ゲーム、映像などのメディア芸術を通して学ぶことで、日本の文化に関する理解を深めることが期待されており、デジタル学習基盤の整備が進んだ状況も相まって、更なる充実が期待される
- その一方で、授業の中で指導していくことや、学びを深めることの難しさについて指摘がある

(3) 改善の方向性

総論

- 目標及び見方・考え方、内容について、以下の改善の基本的な方向性が考えられる

- ① 捉えたり、感じたりしたことを、要素・特徴や背景にある文化との関わりで理解したり、思考・判断・表現したりすることができる
- ② 表現したいことをどのように形にできるか、他者に伝えることができるか、という自分の思いや考えをもつことができることや、諸感覚を働かせつつ身体性を伴った技能により表現することを重視
- ③ 表現及び鑑賞の学習において、正解は一つではなく、児童生徒一人一人のありようが尊重されるべきものであること
- ④ 表現及び鑑賞の学習において、工夫したことや感じたことを伝え合うなどの言語活動等を通して、感じ方や考え方を深めるようにすること
- ⑤ 他者とともに協働する学習を通じて、共感したり多様な視点で考えたりできるようにすること
- ⑥ 生活や社会、文化などとの関わりや、意味や価値を見いだしたり、作りだしたりするなど豊かな社会の創造や幸福な人生につなげていくことについて示すこと

- 表現について自分の思いや考えをもち、その思いや考えを基に身体を用いて表現するプロセス全体に働く資質・能力を、「思考力、判断力、表現力等」として整理すること
- 構造化を踏まえ、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」を一体的に育成するとともに、「深い学び」を授業で具現化していくこと

2. 目標及び見方・考え方のあり方①

(1) 目標のあり方

目標のあり方

- 芸術系教科・科目の目標の柱書については、表現及び鑑賞の活動（義務教育段階）や、芸術の幅広い活動（高等学校段階）を固有の学習過程とし、教科・科目の特性や発達段階を踏まえ、育成を目指す資質・能力の趣旨を示している現行の記述はおおむね妥当
- 芸術系教科・科目の資質・能力の3つの柱に係る目標のあり方については、1（3）の改善の方向性を踏まえ、改善を検討
- また、高等学校芸術科の教科目標においては、以下の観点からの改善を図る
 - 知識及び技能について、芸術科に属する科目に対応する特質ではなく、社会における芸術分野との関連を重視するとともに、幅広く芸術文化として捉えること
 - 思考力、判断力、表現力等について、作品がもつメッセージ性や文化的・歴史的意義、社会への影響力などをより意識できるようにすること
 - 学びに向かう力、人間性等について、心豊かな生活や社会の創造における芸術が果たす意義の明確化

資質・能力の整理に係る改善の方向性

- 現状の課題を踏まえ、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付けられるようにすること、それらを活用して思考力、判断力、表現力等を育むことを往還しながら、未知の状況に対応できる思考力、判断力、表現力等を育むとともに、生きて働く知識及び技能を習得できるよう改善を図る
- その際、児童生徒自身が自分の思いや考えをもつことができること、その思いや考えを技能を活用して表現できるようにすることや、一定の手順や段階を追って身に付く個別の技能のみならず、変化する状況等に応じて主体的に活用できる技能として習熟・熟達していくことを重視

【教科・科目ごとの方向性について今後整理】

2. 目標及び見方・考え方のあり方②

(2) 見方・考え方のあり方

芸術系教科・科目における見方・考え方について

- 見方・考え方は、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核に焦点化されるとともに、卒業後までを視野に入れ、よりよい社会や幸福な人生につなげていくことを示すものとして位置付けられる
- このことについて、教師と児童生徒双方が共通の認識をもてるよう、教科の系統ごとに、小・中・高等学校を通して文言を統一する
- その上で、知性と一体化して創造性の根幹をなす「感性」を共通して重視することとし、教科・科目の特性を踏まえ、感性や想像力を働かせることを示す
- また、文化を継承し発展することを一層重視していくため、教科固有の物事を捉える視点について、文化を共通に含めつつ教科の特性を考慮して示すこととし、教科固有の考え方や判断の仕方について、豊かな社会の創造や幸福な人生に繋げていく教育の充実に資するよう示す
- 以上を踏まえ、芸術系教科・科目の見方・考え方について、以下のとおり整理する
 - 感性や想像力を働かせ、対象や事象を、音や音楽、文化などの視点で捉え、意味や価値を見いだすこと（音楽）
 - 感性や想像力を働かせ、対象や事象を、造形的、文化的な視点で捉え、意味や価値をつくりだすこと（図画工作、美術、工芸）
 - 感性や想像力を働かせ、対象や事象を、美を構成する要素とその働き、文化などの視点で捉え、芸術の意味や価値を追求すること（芸術）
 - 感性を働かせ、文字や書を、書的美を構成する要素とその働き、伝統と文化などの視点で捉え、意味や価値を追求すること（書道）

3. 資質・能力の構造化のポイント

表形式での構造化のパターンについて

- 芸術系教科・科目においては、
 - 知識を自分のものとすることによって、考え方や捉え方の豊かさにつながり学びの深まりが生まれる
 - 表現について自分の思いや考えをもち、思いや考えを基に、身体を用いながら技能を働かせることによって表現したり鑑賞したりする。この過程を往還しながら資質・能力が育成されていく点に特徴がある
- このような点は「知識及び技能」が全体として「思考力、判断力、表現力等」の深まりを助ける構造に近いものとして考えることができることから、「並行パターン」で構造化

学習内容や高次の資質・能力の区分方法について

<芸術系教科・科目共通の示し方に関する方針>

- 高次の資質・能力の示し方の基本的なまとめりとして、芸術系教科・科目に共通して「A表現」及び「B鑑賞」の2つの領域に整理したうえで、音楽、図画工作、美術、工芸では教科・科目の特質や現状における課題を踏まえて区分を設ける
- 小・中学校については、学校段階ごとにまとめりで示し、高等学校については各科目の系統（音楽、美術、工芸、書道）ごとに、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのまとめりで高次の資質・能力等を示す

【教科・科目ごとの方向性について今後整理】

4. 内容の改善のあり方①

(1) 内容の充実について

内容のあり方

芸術系教科・科目の内容のあり方については、1（3）の改善の方向性を踏まえるとともに、以下の観点から改善

【教科・科目ごとの方向性について今後整理】

- 高等学校芸術科については、音楽、美術、工芸、書道を選択して履修するが、現状では学習内容はそれぞれの科目に関する内容となり、芸術全体について学ぶ機会がない
- このため、芸術教育の果たす役割を踏まえ、以下の観点から改善する
 - 科目の導入段階において、生徒が小・中学校における学びを踏まえ、芸術を学ぶことの意味や価値など「芸術」そのものを学ぶ機会を設定することなど
 - 科目のまとめ段階において、「芸術」に属する各科目の芸術分野に関わる探究的な学習を設定するなど、生徒が身に付けた資質・能力をもとに芸術の意味や価値を追求し、心豊かな生活や社会の創造につなげていくこと

4. 内容の改善のあり方②

(2) 内容の精選について

精選の方向性について

- 芸術系教科・科目は、題材に取り組むことを繰り返しながら、資質・能力の確実な定着を図るとともに、「深い学び」を実現していくことに特長がある
- 学校における指導計画の作成段階において、児童生徒の実態等を踏まえ、目標の達成に支障のない範囲で、設定する題材における既習の内容等を調整するなど、学校の実態に応じた題材構成の工夫を行うことができることを考慮しつつ、内容を精査することが必要

各教科等における精選内容について

<音楽>

- 「歌唱」及び「器楽」を「歌唱・器楽」の区分として統合し、内容事項を精査することにより、授業のねらいや子供の実態に応じて柔軟で効果的な指導を行うことができるよう改善（小学校）
- 自分でやってわかる（理解する）ことを前提として、技能と知識を統合して一文で示すなどすることにより、焦点化した効果的な指導を行うことができるよう改善（小・中・高等学校）
- 具体性の高い記述について精査を行い、内容の取扱いに移行するなどにより、授業のねらいや子供の実態に応じた柔軟な指導を行うことができるよう改善（小・中学校）

<図画工作、美術、工芸>

- 表現領域において育成する技能について、各区分に共通する材料や用具の扱い、表現方法などを考慮して示し、技能を相互に関連付け指導内容の重点化を図ることができるよう改善（小・中・高等学校）
- 鑑賞の技能を明確にするなど鑑賞活動を通して育成する資質・能力を整理することにより、焦点化した効果的な指導を行うことができるよう改善（小・中・高等学校）

<書道>

- 表現の各分野（漢字仮名交じりの書、漢字の書、仮名の書）及び鑑賞のそれぞれにおいて、字形、全体の構成など、具体的に示していたものを、〔共通事項〕において書を構成する要素などの働き・関係として指導事項を精査することにより、学校等の実態に応じて柔軟な指導を行うことができるよう改善
- 鑑賞の技能を明確にするなど、鑑賞活動を通して育成する資質・能力を整理することにより、焦点化した効果的な指導を行うことができるよう改善

4. 内容の改善のあり方③

教科書の精選の在り方について

- 教科書に掲載されている教材等の中から教師が適切に選択したり参考にしたりして指導することができることを、教師が読み取りやすいような構成が期待される
 - 教師が「高次の資質・能力」を踏まえ、創意工夫を生かして柔軟に授業づくりができるようにする構成上の工夫（小学校の例：一つの教材について歌唱又は器楽、さらには合唱奏で扱うなど、様々な学習活動ができるようにする）（音楽）
 - 鑑賞の学びの充実に資するよう、造形的な特徴、造形の要素、書を構成する要素などを手掛かりに、技能を活用して児童生徒が能動的に鑑賞できるような構成上の工夫（図画工作、美術、工芸、書道）
 - 小・中学校における学びを踏まえ、高等学校における芸術そのものを学ぶ機会に資するよう、例えば、見返しなど教科書の冒頭のページなどに、文化や芸術の広がりや多様性、芸術が生活や社会に果たしている役割、芸術を学ぶ意義や価値などについて考えることができるような構成上の工夫（高等学校芸術科のIを付した科目）

5. 学習・指導・評価の改善充実のあり方

ICTの効果的な活用について

- GIGAスクール構想により1人1台端末の整備が進んだ現状では、芸術系教科・科目においてはICTを活用した取組が行われている
 - 一方で、実際に身体や材料、用具、楽器などを使って表現する活動との調和を図りながら、ICTを効果的に活用することについては、様々な感覚を働かせた深い学びにつなげることに課題が見られる
 - これらの課題の解消に向けて、以下の方向性のもとでICT活用を一層推進することが必要
 - 身体性を基本とする人間の本来的能力としての技能が重要であるということを前提とした上で、ICTの適切な活用が知識及び技能の習得や主体的に学習に取り組むことに加えて、思考を広げたり深めたりすることにもつながるようにしていくこと
- (※) ICTの適切な活用においては生成AIを含むこととするが、発達の段階を考慮しつつ学習指導要領に示す資質・能力の育成に寄与するよう配慮することを前提とする
- ICTが用具としての利用にとどまらず、芸術系教科・科目の本質的意義である感性や創造性の涵養に資するようにしていくこと

学習評価の改善充実について

<現状と課題>

- 現状、芸術系教科・科目においては短時間の題材や単元を行う場合、資質・能力の3つの柱全てについて評価をしようとする、形成的評価をする余裕がなく総括的評価のみを行うといった実態が見受けられる
- 思いや意図をもつことと、それを音楽表現することの評価が子供の学習の流れと必ずしも合っていないという課題や、制作の過程での評価が難しく完成作品のみから技能や思考・判断・表現の評価を行う現状などが見受けられる
- これらを踏まえて、以下の改善の方向性のもと取り組んでいくこと
 - 題材や単元ごとに全ての観点で記録に残す総括的評価を行うという前提に立つのではなく、学校等の実態に応じて年間指導計画を踏まえた上で、複数の題材や単元、区分でまとめて総括的評価を行うことも可能であることを促す
 - 児童生徒一人一人が着実に資質・能力を身に付けることができるよう、学習の調整等を促す形成的評価を中心に行う
 - 「思考・判断・表現」の総括的評価を行う場合においては、思いや意図をもったり、発想や構想をし工夫したりし、歌唱、演奏、作品等に表す一連の過程の中で児童生徒の姿を捉える

【全体を通じて、これまでの議論を踏まえ更に整理】